

考古学史断片

—中山平次郎、曾畑貝塚踏査の再評価—

装飾古墳館長 木崎 康弘

1 はじめに

九州帝国大学（現、九州大学）医学部の教授だった中山平次郎は、熊本県宇土市の曾畑貝塚を踏査し、そこで採集した土器を分類し、それらの成果を1本の論文に取りまとめて、『考古学雑誌』誌上で報告した（中山 1918）。これは考古学史上の事実なのだが、やや違った趣旨で評価されることが常であった。例えば、宇土市教育委員会が発行した曾畑貝塚の報告書（宇土市教育委員会編 2011）での評価をみてみよう。

「（前略）表採資料を土器の文様から分類し、その特徴を報告した」

また、清野謙次も、『日本貝塚の研究』（清野 1969）の中で、次のように記してもいた。

「大正七年に至つて中山平次郎氏は『考古学雑誌』第八巻第五号に『肥後国宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器』といふ一文を掲げた。これは中山氏がこの貝塚の表面採集によつて獲られた土器片を基礎として、この貝塚の土器紋様を論じたものである。」

このように、兎にも角にも、縄文時代の遺跡の調査、採集した土器の報告として取り扱われる嫌いがあったのだ。確かに、縄文時代前期の曾畑式土器の標式遺跡として全国的にも著名な曾畑貝塚であるから、至極尤もな評価ではある。しかも、そこに示された挿図のほとんどは、縄文式土器だったのだから、それはそれで当然なのだろう。

ところが、もう一度読み直したところ、そういう評価では済まされない点に気付くことができた。そもそも、中山がどのような意図を持って曾畑貝塚を訪れ、その成果を報告したのだろうか。あくまでも管見の及ぶ範囲ではあるが、その意図にスポットライトを当てた議論があったか否かは、知らないところである。

そこで、今回は、如上の観点で、中山の意図に思いを致してみよう。

2 中山平次郎論文までの曾畑貝塚調査研究の歩み（抄）

熊本県宇土市大字岩古曾字曾畑にある貝塚である。そこから見つかる土器は、縄文時代前期、後期、晩期の土器で、既述のように、前期土器の一つ、曾畑式土器の標式遺跡でもある。そんな貝塚が見つかったのは、いつのことだったのだろうか。話題をそこから始めることとしよう。

1889（明治 22）年 6 月 19 日、寺石正路は、「九州漫遊」と称した調査旅行の途次、貝塚の所在情報を得るために熊本県庁を訪れ、魚住弘河なる人物に面会した（寺石 1894）。

「余十九日熊本県庁ニ在リ魚住弘河氏ニ会スルヤ肥後國中貝塚ノ有無ヲ探ラント欲シ海浜川旁ノ地貝殻ノ堆積或ハ散布セル処ナキヤヲ問フ」

その面会の目的は、貝塚の所在情報。すると、次のような応えが返ってきたという。

「宇土郡曾畑村ニ蠣殻ノ散布セル畑アリ土民之ヲ用ヒテ石灰ヲ製ス或ハ是乎ト」

要するに、寺石が熊本県庁で魚住に「貝塚を探しに来たのだが、心当たりはないか」と尋ねたら、「宇土郡の曾畑村に牡蠣殻が散布している畑があって、地元の人がそれを焼いて石灰を作っている。そこかもしれない」との答えだったのだ。そして、21 日午前 10 時に現地に立つと、そこはまさに貝塚だったのだ。

そこで寺石は、そこを発掘すべく、「石灰竈場ノ主人」の木村定次郎（註 1）に人集めをお願いした。そして、翌 22 日まで発掘したのだった。そこで、出土したものは、「自然石ヲ琢磨セル石斧 一

個 黒曜石の破片 数箇 白石 一箇 凹痕アル石片 一箇 獣骨 若干 蠟蛤浅利貝佐々目貝等
若干 縄紋土器破片 若干 渦紋土器破片 若干」と記していた。そしてその成果は、「九州ノ
貝塚」と銘打って『東京人類学会雑誌』第5篇第53号で公にした(寺石 1890)。

この寺石の曾畑貝塚の発掘を受けて、肥後の現地調査・発掘を行ったのが、帝国大学(後の東京
帝国大学、現、東京大学)の若林勝邦だった。寺石が1889(明治22)年12月8日の「東京人類
学会第五六会」で行った、「豊後ノ遺跡実見談・渦紋土器ノ製法」という演題の講演から20日後
の12月28日、若林は、東京を出立し、翌年の1月3日に熊本入りした。その後、1月31日に
帰京するまでの、ほぼ1月間、熊本県内を調査したのだった。

この調査の中で、曾畑貝塚の発掘も試み、その成果を「九州旅行談」(若林 1890a)と「肥後に
於ける石器時代遺跡調査報告」(若林 1890b)で報告した。それによると、その規模は、「面積凡
ソ七畝貝殻堆積ス厚サ凡ソ三尺ト昔ハ二三町ニ涉リシガ如シ」。また、磨製石斧1点、土器(口
縁部、底部、胴部)数点、獣骨1点、貝殻(牡蛎、蛤、さゝめ、あさり、志ゝがひ)が出土したと
いう。また、土器には、次のようなものがあったという。

「土器ハ縁、腹部二種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ畫ケル斜線アリ
縄紋ヲ印セルアリ各種趣ヲ異ニセリ」

この中、「刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ畫ケル斜線アリ」は、その表現から曾畑式土
器の文様の特徴を表現したものだろう。つまり、曾畑式土器研究史における最初の土器分類記述と
いうことになる。

そして、これらの発掘が機縁となって、1896(明治29)年に発行された『日本石器時代人民遺
物発見地名表』に、「宇土郡岩古曾村貝塚 土器、石斧、獣骨 若林勝邦報 四九」「宇土郡曾畑村貝塚
土器、半磨石斧、凹石、積極材料、獣骨 寺石正路報 五三」という二つの情報として盛り込まれた。
若林が「宇土郡岩古曾村(旧名曾畑村)」貝塚と報じ、寺石が「肥後曾畑村貝塚」としたことによっ
て、異なった貝塚として取り扱われたのだった。

この取り扱いは、その後、第2版(野中編 1898)、第3版(野中編 1901)でも同様で、一つの
貝塚として統合されたのは、1917(大正6)年の第4版(柴田編 1917)になってからだった。

「宇土郡花園村。岩古曾。曾畑、貝塚 土器、石器、磨石斧、凹石、獣骨 若林勝邦 寺石正路
四九 五三」

かくして、永く異なった貝塚を見なされてきた「宇土郡岩古曾村貝塚」と「宇土郡曾畑村貝塚」だっ
たが、「岩古曾。曾畑、貝塚」として統合されることになった。

3 中山平次郎の曾畑貝塚踏査と「中間時期」論

(1) 曾畑貝塚の踏査とその意図

中山の曾畑貝塚踏査は、ある意味画期的なことだった。それは、明治期から引き続いてきた日
本人起源の議論の中で、その材料を集めるための人骨調査が貝塚調査の中心だった、大正期の肥
後の考古学にあって、現地で土器を採集し、それを分析する調査研究だったからだ。礪貝塚の発
掘の調査報告を取りまとめる中で、濱田耕作と榊原政職が出土遺物を詳しく分析・研究したこと
(濱田・榊原 1920)と共に、重要な意味を含意していた。

中山は、ある意図を以て、1917(大正6)年、「肥後国宇土郡花園村岩古曾字曾畑貝塚」(中
山 1918)を踏査した。そして、そこで「唯貝殻に混じて耕作面に散乱して居る土器の破片や石
屑を採集」した。「石器にも注意はしたが黒曜石石鏃の破片と覚しきものを得た」だけで、「表面
採集の事で余の獲た土器は何れも細かな碎片のみ」だったという。そうはいっても、「比較には
之れでも事足る」とも言っていた。「二川村貝塚の土器の或るものに縁を引いて居るらしい其以

南の貝塚土器がどんなものである歟といふ事」を確かめるためには充分だったのだろう。中山の意図は、まさにここにあったのだった。そして、その意図を案出した動機が論文の書き出しにあった。

「本誌第七号第十号以下に『九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て』と題して、余は我邦の石器古墳両時代の過渡期には石器及金属器が併用せられた時代があつた事を述べて、特別の憑証を挙示でざる限り石器を以て漫然先史時代遺物と看做すの不可を説いたのであつた。」

この行の冒頭、「本誌第七号第十号以下に『九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て』とは、『考古学雑誌』に四回に亘って執筆された長文の論文（中山 1917 b～e）のことだ。まさに、論文執筆の動機が、この「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」だったことが分かるのである。そこで、まずは、中山の「中間時期」の提唱から始めることにしたい。

(2) 「中間時期」の提唱と探究

① 「中間時期」の提唱

中山は、「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」の起稿の契機を次のように紹介した（中山 1917 b）。

「銅銚銅剣新発見地板付字田端に於ける見聞は業に本誌第七卷第七号に報道したる処にして、要するに余は此地に於て狭鋒銅銚及細形銅剣各三口の外、其発掘原地に遺存したる大甕及小容器破片を見、尚同所より出土したる石斧二個を検するを得たるなり、採集したる窯器破片を一覧するに、小形器物破片の或るものは曩に余の糸島郡今津貝塚より採集したる破片と酷似せるものにして、此物が又地板付発見の大甕破片のあるものと関係絶無ならざる如く感ぜしめたるは最も余の注意を喚起したる処なり。」

「本誌第七卷第七号に報道したる」「銅銚銅剣の新資料」（中山 1917 a）によれば、1916（大正 5）年 3 月から「地板付字田端」（現、地板遺跡の南側）で、「地下げ其他の用土採掘」が始まった。その折に、「二口宛口を合せて横に埋めたる口径二尺許深さ三尺余の大甕」、つまり口径約 60cm、深さ 90cm 余の合口の甕棺が見つかったという。それを破砕したところ、「其内部に朱と思しき赤き色料を交へたる土壤を認め、其中三ヶ所のものより六口の鋒及剣」が発見されたという。

この情報を「友人高山鐵馬君」から聞き付けた中山は、二度の現地踏査を試み、銅銚、銅剣の調査と共に、「同所区長並に農民二三に就て其出土状態を聴取し、尚同地に散在せる窯器破片を採集」したという。すると「一個の大なる破片の内部に固着せる土塊に朱及銅鏽碎片の混ざる」を確認、つまり、朱と銅鏽が附着した甕棺を見つけたのだった。しかも、採集した土器片の中に、「曩に余の発見したる糸島郡今津貝塚の土器と酷似」したものがあつた。

この遺跡で得た知見によって、中山は「中間期間」の存在に気付いた。弥生式土器は先史時代（石器時代）の土器で、青銅器は原史（古墳時代）のものとの認識が主流だった、当時の考古学界にあって、ただ事ではない事実だった。「極めて重大な問題提起となるに違いない」と思ったのだろう、その類例を集めるために、「博多湾沿岸四郡」（中山 1917 e）の現地踏査を行った。その結果、先史時代と原史時代の「其過渡期として謂はゞ中間時代とも称すべき金石両様の利器が同時に行はれたる一時期」（中山 1917 e）としての「中間期間」を提唱したのであった。

② 「中間時期」の探究

中山は、「中間時期」の探究を進めた。

まず、「筑前南部より筑後」（中山 1918）と、その範囲を広げた。そして、「前と同様の遺跡を探索して山門郡に至る間に其多数を発見し遺物を調査して見たが、結果は前と略々同一」

(中山 1918)だったと述べた。実は、その切っ掛けとなったのが、肥後の遺跡だったようなのだ。「九州に於ける弥生式土器と貝塚土器」(中山 1917 f)に次のようにあった。

「大正五年夏熊本県庁で拝見した同県下阿高貝塚の土器は余をして意外の感を発せしめたと同時に又多大の研究の興味を喚起せしめたのであつた。此土器が関東奥羽地方で見出さるゝ所謂貝塚土器に似て居るといはんより寧ろ同種に看做すべき者であつたからである。」

そこで中山は、「余にとつて緊要になつて来たのは九州に於ける両形式(弥生式土器と貝塚土器一筆者補記)の関係」(中山 1917 f)に興味を移したのだった。そして、その問題意識として、こう自問した(中山 1917 f)。

「余の調査を南方に進めると何地歟で貝塚土器に出逢うに決まつて居るが、之が何処であろう歟」

「又最初のものが如何なる形態を以て出現するであろう歟」

こうして、中山は、「是等の事項を一応決定」したいということで、「歩と転じて山門郡より三池郡に入つて試みに渡瀬駅近傍の二川村貝塚を調査」(中山 1917 f)した。「山門郡」とは現在の福岡県柳川市からみやま市にかけての福岡県南部で、「三池郡」とは福岡県みやま市の南部から大牟田市にかけての、熊本県境である。そして「渡瀬駅近傍の二川村貝塚」は、1922(大正 11)年に清野謙次が発掘を試みた貝塚で、現在みやま市高田町の二川貝塚のことだ。

中山が現地で採集した土器片は、小破片が僅かだったようで、「貝焼の際に又耕作の折に取捨てられたのである歟今は零細な破片を少し許見るに過ぎぬ(後略)」とのこと。ただし、そこにあった土器片には、「(前略)余の此迄地方で見たものと趣を異にして」おり、「注目に値する」ものだったとも述べた。そして、それらの拓影を示しながら、先の二点に迫ろうと試みた。すると、「一定の相違が現はれ」始めたようで、その成果を次のように整理。

「博多湾沿岸から山門郡迄の間には唯弥生式土器の遺跡のみ」

「一步此処から南進して三池郡に出入ると土器の様子が少し變つて来る」

そして、こうした二様の違いを踏まて、次のように結論付けたのだった。

「山門郡以北の遺物と二川貝塚(三池郡一筆者補記)の遺物とを対照すると、九州に於ける貝塚土器と弥生式との南北両系の交渉は此の三池郡の辺から初まつて逐次南方に及んで居るのである。」

(3) 曾畑貝塚踏査の背景

「三池郡の辺を境として之れより北方には貝塚土器を見ぬといふ事実は簡単な事柄のやうであるが、実は此處に種々な問題が生り下つて居るやう(後略)」(中山 1918)

中山は、調査で得たというこの現象について、さらに「如何に搜してもどうしても出て来ぬといふ程の確實性を具へたもの」にしたいとの思いが強くなった。そこで、「筑後方面の弥生式土器遺跡を更に一応搜索」することと併行して、「貝塚土器の方にも一層厳密な注意を払う事にして三池郡の辺より再び北方に向て背進」しながら調査をしようと企てた。その企ての前段として考えたのが、「二川村貝塚の土器の或るものに縁を引いて居るらしい其以南の貝塚土器がどんなものである歟」だった。そこで「既知の遺跡を踏査する方が得策」だと、白羽の矢を立てたのが、「宇土駅附近の花園村岩古曾字曾畑の貝塚」、つまり曾畑貝塚だったわけだ。

「此曾畑の貝塚の発見が何時であつた歟は余の知らざる処であるが、明治二十三年一月に故若林勝邦君が之を調査して居らるゝによると(人類学雑誌第五卷第四十九号)既知の貝塚として大分古い方である。随て此遺跡は多数研究者の熟知せらるゝものに相違無く其所在や現状や貝層等に就て特に説明する必要もなさう」

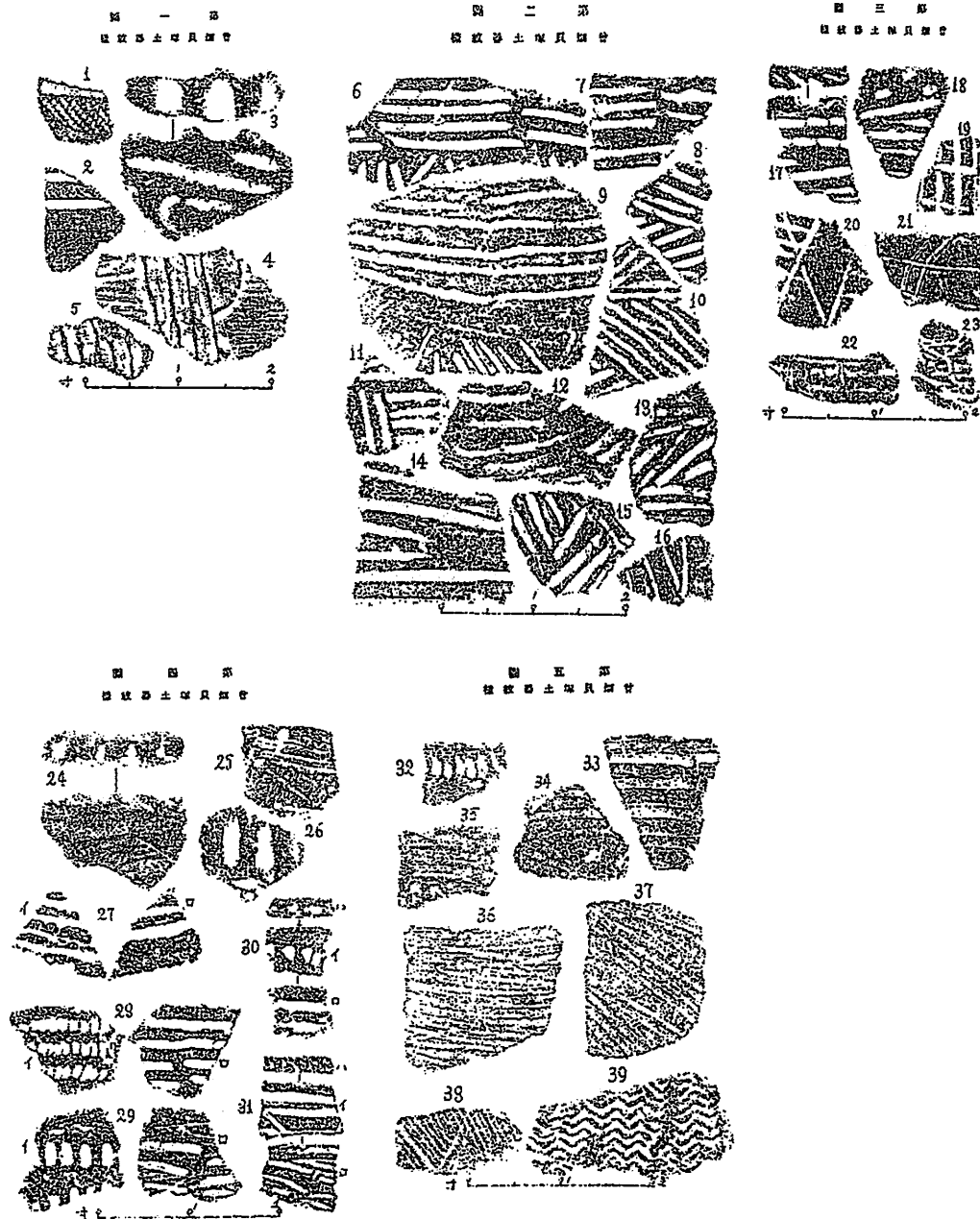
「随て此遺跡は多数研究者の熟知せらるゝものに相違無く其所在や現状や貝層等に就て特に説

明する必要もなさう」とは、実に合理的な判断である。

4 中山平次郎、曾畑貝塚土器とその評価

(1) 曾畑貝塚土器の説明

中山は、拓影を示しながら検討を加えていった（下図）。そのスタンスは、「（日本列島の一筆者補記）東西両方の貝塚土器比較の為、抽象的辞句丈で無くして九州方面の貝塚土器は一体どんなのである歟」というもの。



掲載された拓影は、第一図から第五図までの39点。それを文様などによって種別して、挿図毎に簡単な説明を加えていった。

第一図に掲げられたのは、5点の拓影。「席紋を示した破片」2点、「阿高貝塚の土器に多く見るやうな太い粗い浮紋の優秀な曲線紋様を有する縁部破片」1点、「地に刷毛目があつて浮紋の細い直線と弧線とから成つた紋様と有するもの」2点だ。「席紋を示した破片」の「席紋」とは、蓆状の文様のことで、鐘崎式土器などの磨消縄文の土器にあたるだろう。説明では、「東京地方の貝塚土器より寧ろ狭義の弥生式の席紋に近く」、「若林君報告の『縄紋を印せるあり』」の類とした。「(前略) 曲線紋様を有する縁部破片」は、阿高式土器であろう。両貝塚は、「木原山の向ふと此方といふ」位置関係もあり、注意して搜したとあった。次の中山が「刷毛目」とした土器の紋様は、おそらく条痕のことで、微隆起文が付された礪B式土器である。

第二図は、11点の「篋書の横又は斜なる平行線紋様を示したもの」で、曾畑式土器のようだ。最も多く採集されたが、「何れも大同小異であるから一部を掲載」したとあった。

第三図の7点の拓影の土器は、「前のと大差無きもの」との説明。口唇部に「斜線の列」があったり、「点状の凹み」があったり、「矩形の格子紋」だったり、「菱形の格子紋に平行線を加へたもの」は、曾畑式土器だろう。この他に、「細い篋書紋様」があった。この中で、「菱形の格子紋に平行線を加へたもの」は、「若林君の『斜線の交叉あり』の中」にあったもののようだと述べた。

第四図は、8点だった。器面は無文で、口唇部に「点々の刻み目があるもの」「さゝくれのある棒尖で引いた二条の線(中略)、其一端に小さな凹みが二つ並んで居るもの」「太い粗い浮紋のあるもの」がそれぞれ1点。残り5点は、表裏「両面に紋様があるもの」で、「篋書の線紋様」や「点々紋様」があった。曾畑式土器だろう。「若林君の『表裏に画ける斜線あり』」と「似たものであろうと思はれる」とのコメントがあった。

第五図は、8点の拓影が載せられていた。口縁部近くに「点々が列んで居るもの」1点、「さゝくれのある棒尖で浅く平行線紋様を描いたと思はれるもの」3点は、曾畑式土器。「刷毛目あるもの」2点は、条痕の器面調整の礪式土器であろう。裏面に「三角紋様に斜の平行線を附したもの」1点は、刷毛目。中山も「寧ろ弥生式土器といふべき性質を表わしたものと」指摘しているように、弥生時代後期の土器片だろう。「重複して波紋様があるもの」1点は、「貝塚土器の紋様とは思ひ難い」とあったが、山形の押型文土器のようだ。

(2) 曾畑貝塚土器の評価

中山は、個々の採集土器について説明した後、その評価を詳しく加えた。その視点は、「二川村貝塚」で採集した土器との比較が一つだった。「稍ゝ隔遠して居るから土器紋様にと連絡を見出し得るや如何」と思ったようだが「相互の間に連絡を認めねばならぬものが出て来た」と評価した。類似したものとしては、「席紋を示した破片」とされた鐘崎式土器などの磨消縄文の土器が挙げられた。そして、「山門郡以北の両筑地方からは発見されずして、(中略) 遠く隔つた東北地方から、見出され、狭義の弥生式にも之(席紋—筆者補記)がある事は、古代土器調査上興味ある事実」と評価した。そして、次のように踏み込んだ解釈を加えた。

「余は東方の弥生式に席紋があるのは関東歟或は其西歟で『アイヌ』式土器の影響を受けて一風を生じ(中略) 両筑地方の弥生式に之を見ぬのは恠(かか)る影響を受くるといふやうな事が起こらなかつた為(後略)」

次に、よく似た文様としたのが、曾畑貝塚で採集した「阿高貝塚の土器に多く見るやうな太い粗い浮紋の優秀な曲線紋様を有する縁部破片」、つまり阿高式土器だった。「中間時期」の探究の切っ掛けとなった「熊本県庁で拝見した阿高貝塚の発見物」と同じもので、さらに「九州よりは寧ろ東北地方に多く見出され居る事は吾人の注意を喚起せしむ」と評価した。「席紋を示した破片」

も然りで、「昔本邦の東西に別れて本源を一にした或る民族が居たと思わねばならぬ」と断じた。「九州における弥生式土器と貝塚土器」の中の「弥生式と貝塚土器との分布」の偏在でイメージした解釈、「アイヌ」が元来南方系統の民族なるべき事（中山 1917 f）としたことを含んでのことだった。今日では、及びもつなかい議論が展開されていたことになる。

さらに比較は続いていったのだが詳細は省くこととして、最後の結論部分に目を転じ、関係しそうな、主な行を簡条書き的に抜き書きしておこう。

「二川村貝塚の土器が縁を此曾畑貝塚の土器が引いて居るのは確實（中略）然かも此筑後南部のものが隣国なる肥後のものと関連して居るばかりでなしに、之が又遠く本邦の東北四方のものと連絡して居るのは貝塚土器研究上注目すべき事実」

「『アイヌ』が昔日本全土に居たのであるとは彼ら『アイヌ』の『コロボックル』談と同様な学界の昔話になりそうである。」

5 おわりにかえて—中山平次郎、曾畑貝塚踏査・報告の学史的意義—

中山は、自らが提唱した「中間期間」の議論の資料的な補強をするために、曾畑貝塚を踏査した。そこでの成果は、前記した行の内容であった。ただし、その成果は、今日の議論と共有できる内容とはなっていなかった。つまり、今一度、中山による曾畑貝塚調査の学史的な意義を整理することは必要になってきそうだ。このテーマを閉じるにあたって、その辺りのことを話題にしておきたい。

「中間期間」の設定は、それまで一般的にイメージされてきた、先史時代（石器時代）から原史時代（古墳時代）へ時代的な移行に対して異論を差し挟む議論だった。その結論は、「石器及其関係遺物」が時代的な要素となっていた「従来所謂石器時代」と、「古墳発掘物及其関係遺物」が要素となっていた「従来所謂古墳時代」との間に「中間時代」を設けようするものだった。「中間時代」は、新しくなるに従って、「石器及其関係遺物」の要素が次第に減少する一方で、「古墳発掘物及其関係遺物」が増加していった過渡期で、「金石両様の利器が同時に行はれたる一時期」と説明された。そして、「石器時代＝先史時代」「古墳時代＝原史時代」との対応関係を次のように改めた。

- ・「『先史時代』＝『石器及其関係遺物』の多い『中間時代』の前半期」
- ・「『原史時代』＝『古墳発掘物及其関係遺物』の多い『中間時代』の後半期」

1883（明治 16）年 6 月、当時、帝国大学予備門に通っていた有坂鋁蔵は、「射的場を通り抜け、此の草原の中に出て、対岸の上野公園の方を眺めて居りますと、ふと足下に貝殻が草の中から沢山に露われてゐるのを見出し」（有坂 1929）で貝塚を発見。「其後明治一七年の三月に坪井白井両君と研究を共にすることを得るやうになつたので（有坂一九二九）」（蒔田 1896）、帝国大学理科大学学生の坪井正五郎と白井光太郎を案内して、口縁部と頸部を失った壺形土器を発見した。その後、その場所が東京市本郷区向ヶ岡弥生町（現、東京都文京区弥生）であったこともあり、「初テ弥生ケ岡ヨリ発見セラレタル故ニ人類学教室諸氏が弥生式ト名ツケラレタル」（蒔田 1896）こととなった。蒔田鎗次郎の、弥生式土器の発見と命名の記述だった。

また、この蒔田の論文の中には、学史的にも重要な行が記されていた。「右ニ述ベマシタル是等ノ土器ハ貝塚土器トハ一種異ナルモノニシテ」や、「其形チノ製作ハ貝塚土器ニ比ブレバ大イニ巧ナレ裝飾ニ至リテハ極メテ簡単ナルモノニシテ云云」がそれ。蒔田によって、貝塚土器（縄文式土器）とは異なったものとの認識が初めて示された、その行だった。

このように、縄文式土器と弁別されるようになった弥生式土器だったが、その時代性が把握されるまでは、まだまだ時間を要することとなった。そして、明治期の人種民族論争の風潮も手伝って、その間は、民族差との認識が一般的なものとなった。

中山が「中間時期」の議論を始めた大正期は、まさにこの弥生式土器の時代性の議論が始まった

時期に当たっていた。この議論に関して、特に、縄文式土器と弥生式土器と年代差を指摘し、且つそこに系統があったことを述べた濱田の記述（濱田 1918）は、極めて重要なものだったと評価されている。

「第二の事実、弥生式土器と同一層位或は少しく下方の層位より関東東北の貝塚より多く発見せらるゝ所謂アイヌ式縄紋土器に近似せる土器を発見せしことなり。」

「備中津雲貝塚薩摩指宿遺跡の如きは縄紋的土器は比較的下層に、弥生式土器は其の上層より出で」

「此の兩事実及び他の類例よりして、斎瓮（須恵器―筆者補記）弥生式及び縄紋的土器の三者は互に使用人民と時代との間に連絡関係あると共に、縄紋的のもの最も古く弥生式之に次ぎ、斎瓮最後に現出せることを想察せしむ」

また、その時代性が金石併用時代（註2）や金石併用期と表現された。例えば、濱田の記述に見られた「我が石器時代若しくは金石併用時代の年代」や、「この（銅鉾銅剣類の―筆者補記）の配列は自ら金石併用期の遺跡出土品にはじまり古墳発見の類の後に位せる」（濱田 1923）がそれである。

さらに、その時代性に稲作の存在を認めようとした議論も行われた。例えば、中山は、「大正六年筑後国八女郡長峯村大字岩崎石人を以て有名なる岩戸山南方の弥生式土器遺跡より出土したる焼米」（中山 1920）との行を載せていた。それは、山内清男もそうだ。「石器時代にも稲あり」（山内 1925 a）の末尾に次のように記した。

「枅形罎貝塚の土器に稲実の圧痕を有する者あるは、我石器時代人の中には稲を培養し、農耕を行ひたるものありしを証明して余りある（中略）彼等の生活が世人の想像するが如く野蛮、原始的でなかつたことは種々の方面より推測するに足り、必しも末期時代に至りて始めて稲を培養せりとは云ひ難きやうに思はれる。」

これを読んでも、石器時代末期に枅形罎貝塚を営んだ人々が稲作を行っていた事実、しかも末期「時代に至りて始めて」始めたわけではなく、石器時代末期に一定期間の稲作を行った時代があった可能性を述べてもいたのだ（註3）。

弥生時代の時代設定は行われていなかった大正期だったが、その研究においては、さまざまな時代性が既述のように議論されていた。実は、その契機となったのが、中山による中間期間の提唱だった（中山 1917 b～e）。それは、主に北部九州が中心となったものだったが、一方でその議論の、資料的な補強を期すために、筑後に目を移したり、肥後での調査に臨んだりしたのであった。

とはいえ、中山が「この貝塚の土器紋様を論じたもの」と、それを目論んで事に当たったわけではなかったことは、これまで見てきたとおりでもあった。

要するに、大正期の議論を見据えて考えてみれば、中山による曾畑貝塚の踏査やその報告の学史的意義を、従来の取扱いとは異なる観点で確認すべきなのではなかろうか。つまり、中山の曾畑貝塚踏査は、「中間期間」の議論の資料的補強を目論んだ行動であって、その報告もまたその目論みで行われた、との観点である。それらは、大正初期から「弥生式の時代」「弥生式時代」などの呼称が初めて使われた 1932（昭和 7）年（註 4）までに展開された、弥生時代研究の動向の中に位置づけられるべきなのではなかろうか。

そのように感じられてならない。

【註】

- 1 清野謙次は、「木村定次郎」について、次のように書いていた（清野 1924）。

「この部分の地主は曾畑田の人で木村定次郎と云ふ。（中略）偶然とは云ひながら木村氏は僕等に因縁の

多い人である。轟貝塚・阿高貝塚発掘の時、住民から明治初年貝塚の貝殻を焼いた人である。即居村花園村曾畑田貝塚で貝殻を焼いて居たが、貝殻の多い部分が無くなつたので、轟及阿高貝塚を焼いたのだと云ふ。斯くして此三貝塚の貝殻の厚い部分は失はれ、貝層の薄い部分丈に残つたのである。」

これらの行から、学史的事実の追認が行えた。追認とは、1889（明治22）年6月21日に、寺石が行った曾畑貝塚での事実だ。寺石は、「石灰竈場ノ主人ニ請ヒ人ヲ雇」って、曾畑貝塚を発掘したが、その時、人を紹介した「石灰竈場ノ主人」こそ、木村に他ならなかったのである。実は、この木村という人物、寺石の曾畑貝塚の発掘のことが記述されていた『稿本 九州漫遊記』（寺石 1894）の中にも、「石灰竈場ノ主人」として登場した人物だったようだ。

- 2 金石併用時代の翻訳は、濱田耕作であった。『通論考古学』（濱田 1922）の中に、「新石器時代と青銅時代との過渡期を『金石併用時代』（Aeneolithic period）と名付けしは、伊太利のキエリチ（Chierici）等の提唱に係る」
- 3 「石器時代にも稲あり」（山内 1925 a）の記述は、山内清男に言わせる（山内 1925 b）と、「実は私の著作ではなく、畏れ多くも長谷部博士の執筆されたもの」だという。それは、添削をお願いすべく、最後の原稿を長谷部に預けたという。その添削を受けた原稿が山内の校正を経ずして『人類学雑誌』に掲載されたらしい。「従ってこれは未だに自分の稿である気がしていない」とも記していた。そのため、「元の原稿を忠実に世に紹介」することを目的に、1925（大正14）年4月、長谷部に提出した未発表原稿、「石器時代土器底面に於ける稲籾の圧痕」（山内 1925 b）を『山内清男・先史考古学論文集・第四冊』（山内 1967）に掲載した。その関係記述を示すと次のとおりだ。

- 4 弥生時代の時代設定は、山内清男や森本六爾によって1932（昭和7）年に行われた。例えば、山内は、同年8月に発行された『ドルメン』1-5掲載の「縄紋土器の起源」（山内 1931 a）の中で、こう述べていた。

「これに反して弥生式の文化に於いては、新に農業が加わり、又、厚葬の萌芽が見られる。これは当時盛んとなった大陸との交渉と直接又は間接に関係あるものであって、器物としても大陸系の磨製石器の種類が増加し、又青銅器、鉄器も亦輸入或は製作されるに至った。従って、弥生式の文化一般は純然たる新石器時代とは云い難く、金石併用時代と云うべき部分を有する。この時代に始めて見られる大陸との交渉、農業による新生活手段とは、爾後の文化の初期として、又縄文土器文化と対照して、特筆すべき事項である。」

世界史的に見て、新石器時代という時代性ではなく、金石併用時代の性格を帯びるという時代認識が、山内のいう「弥生式の文化」には、あったことが分かる。また、翌月発行の『ドルメン』1-6の「縄紋土器の終末」（山内 1931 b）では、「九州でも縄紋式の時代であって、未だ弥生式の時代ではない」と、縄文時代と対照させた表現もあった。さらに、同年11月発行の『ドルメン』1-8から12月発行の1-9までの「縄文式以後1～5」（山内 1931 c、d）では、各所で「弥生式の時代」が登場し、その時代性が具体的に説明されていた。

一方、森本は、1932（大正7）年に発行を始めた『考古学年報』で使用した時代区分として、「弥生式時代」を設定した。その編集方針として次のように述べた（森本 1932）。

「而して其の時代区分に当つては、従来の『石器時代』『青銅器時代』（或は金石併用時代）『古墳時代』等の名称を廃し、新に、『縄文式時代』『弥生式時代』『祝部式時代』を設定し、其れが件別目録に精細を際めむと欲した。」

【引用参考文献】

- 有坂紹蔵 1929「史前学雑誌の発刊を喜ぶにつけて過去五十年の思ひ出」『史前学雑誌』1-1 史前学会
- 柴田常恵編 1917『日本石器時代人民遺物発見地名表 第四版』東京帝国大学
- 清野謙次 1924「考古漫録 七十六肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑田貝塚附 貝輪の用途」

『歴史地理』43-2 日本歴史地理学会

寺石正路 1890「九州ノ貝塚」『東京人類学会雑誌』5-53 東京人類学会

寺石正路 1894「曾畑村貝塚」『稿本 九州漫遊記』私家版

中山平次郎 1917 a「銅銚銅剣の新資料」『考古学雑誌』7-7 考古学会

中山平次郎 1917 b「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て(一)」『考古学雑誌』7-10 考古学会

中山平次郎 1917 c「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て(二)」『考古学雑誌』7-11 考古学会

中山平次郎 1917 d「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て(三)」『考古学雑誌』8-1 考古学会

中山平次郎 1917 e「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て(四)」『考古学雑誌』8-3 考古学会

中山平次郎 1917 f「九州に於ける弥生式土器と貝塚土器」『考古学雑誌』8-4 考古学会

中山平次郎 1918「肥後国宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器」『考古学雑誌』8-5 考古学会

中山平次郎 1920「土器の有無未詳なる石器時代遺跡(下)」『考古学雑誌』10—11 考古学会

野中完一編 1898『日本石器時代人民遺物発見地名表 第二版』東京帝国大学

野中完一編 1901『日本石器時代人民遺物発見地名表 第三版』東京帝国大学

濱田耕作 1918「河内国国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告 第二冊』京都帝国大学

濱田耕作 1922『通論考古学』大鐙閣

濱田耕作 1923「日本発見銅釵銅銚及銅鏃聚成図録 例言」『京都帝国大学文学部工高学研究報告 第七冊』所収 京都帝国大学(1926年)

蒔田鎗次郎 1896「弥生式土器(貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ) 発見ニ付テ」『東京人類学会雑誌』11-122 東京人類学会

山内清男 1925 a「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40-5 人類学会

山内清男 1925 b「石器時代土器底面に於ける稲穂の圧痕(未発表原稿・大正一四年四月長谷部博士に提出)」『山内清男・先史考古学論文集・第四冊』先史考古学会(1967年発行)

山内清男 1932 a「日本遠古之文化 一 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1-4 岡書院

山内清男 1932 b「日本遠古之文化 二 縄紋土器の起源」『ドルメン』1—5 岡書院

山内清男 1932 c「日本遠古之文化 三 縄紋土器の終末一」『ドルメン』1-6 岡書院

山内清男 1932 d「日本遠古之文化 四 縄紋土器の終末二」『ドルメン』1-7 岡書院

山内清男 1933「日本遠古之文化 七 縄文式以後(完)」『ドルメン』2-2 岡書院

若林勝邦 1890 a「肥後旅行談」『東京人類学会雑誌』5-49 東京人類学会

若林勝邦 1890 b「肥後に於ける石器時代遺跡調査報告」『東洋学芸雑誌』104 東洋学芸社